

I. ようこそ

A. おはようございます！おはようございます！カルバリー・チャペル岩国へようこそ。歌を通して、そして今、御言葉の学びを通して、私たちの主であり救い主を礼拝するために皆さんと共に集まることができて、本当に嬉しく思います。

1. *ご来場の皆様、そしてオンラインでご視聴の皆様、ようこそ。*

B. 礼拝をさらに進める前に、小学生のお子様たちを日曜学校の教室へ送り出しましょう。

1. 先週、私は子どもミニストリーにおけるボランティアの増員についてお知らせし、皆様に私たちと子どもミニストリーのために祈っていただくようお願いしました。神様が備えてくださり、私たちを導き、神様の御心に従って進むべき方向へと導いてくださるよう祈ってほしいとお願いしました。
2. 数名の方からご応募をいただき、大変感謝しております。神様が彼らの中で、また彼らを通してどのように働いてくださるのか、楽しみにしています。しかし、まだ人手が必要です。
3. 先週もお話しした通り、私たちが運営したいすべてのクラスをカバーするには、毎週日曜日18人のボランティアが必要です。もし18人しかない場合、全員が毎週日曜日に奉仕しなければならないになってしまいます。
4. それは私たちの望みでもなければ、期待していることでもありません。負担を分かち合い、多くの人々に奉仕し、成長し、主に用いられる機会を与えたいと願っています。ですから、引き続きお祈りいただき、主がどのように導いてくださるかを考え、私たちの子供たちを愛し、学びと弟子訓練のための年齢に応じたクラスを提供するために、どのように協力できるかをご検討ください。
5. 繰り返しになりますが、私たちは神が働いておられ、カルバリーでのこのミニストリーのために引き続き備えてくださると信頼し、信じています。私たちはただ、子供たちに関して、また神が私たちに彼らに提供してほしいと願っておられるミニストリーに関して、神の御心が何であるかを識別しようとしているのです。主がどのような御業をなさるのか、楽しみにしています。

C. それでは、今朝の御言葉の学びに移しましょう。

1. 先週、私たちはヨハネの福音書7章を終えましたが、今朝は、私が「**容認、非難、それとも罪の自覚**」と題した学びの中で、第7章の最後の節をもう一度見直し、さらにヨハネの福音書第8章の最初の11節と一緒に見ていきます。
2. 今朝、聖書をお持ちの方は、ヨハネによる福音書第8章を開いていただけますでしょうか。もし聖書をお持ちでない方は、周囲の椅子の下に置かれている聖書を自由に手に取って借りてください。今朝、神の御言葉を共に読み進めていくにあたり、皆様ご自身で聖書を読むことが重要だと考えています。
3. ヨハネによる福音書第8章を開いていただいたら、神と神の聖なる御言葉を敬うために、皆さん、立ち上がっていただけますでしょうか。
4. 今朝は、この箇所を最初から最後まで読み上げ、その後、神の御言葉を理解し、実践できるよう、神に祈りを捧げたいと思います。

5. ヨハネの福音書第7章53節には、次のように記されています... (R & P)

II. 導入：写本系統：アレクサンドリア系とビザンチン系

A. さて、今朝はいつもとは少し違ったことを行います。本文を節ごとに詳しく検討していきますが、その前に、私たちの聖書とその由来について、いくつか説明する時間を持ちたいと思います。

B. 今朝の聖書箇所であるヨハネによる福音書7章53節から8章11節は、聖書の中でも特に批判や議論的となっている部分です。実際、皆さんの聖書の中には、この箇所が原本には見当たらない、あるいは最も古く信頼性の高い写本には含まれていないといった趣旨の脚注や注記が記載されているものもあるでしょう。

1. そこで、数分間を割いて、その見解について触れ、その根拠がどこにあるのか説明したいと思います。皆さんを退屈させたくはありませんが、これは非常に重要であり、この学びの場で立ち止まって考える価値があることだと考えています。

C. 皆さんも、私が時折、「出典となるテキストが異なるため、皆さんの聖書と私の聖書の内容が少し異なるかもしれない」といった趣旨のことを言っているのを耳にしたことがあるかもしれませんが、普段はそれだけで終わらせています。

1. しかし今朝は、私が何を意味しているのか、また皆さんの聖書にある脚注や注記が実際に何を意味しているのかをより深く理解していただけるよう、異なる原典について説明してみたいと思います。
2. さて、これは人々が長年にわたり議論を重ね、数多くの本が書かれてきたテーマであり研究対象ですので、今日の限られた時間の中で、この件について網羅的な理解を提供しようというつもりはありません。
3. 私がしたいのは、テキストの基本的な違いを提示し、この問題のさまざまな立場において、私が知的に不誠実だと感じる点について、私自身の信念や見解をいくつか説明することです。

D. つまり、原典の資料に違いがあると言うとき、私が基本的に言及しているのは、ある聖書翻訳者が特定の写本を翻訳の基礎としている一方で、別の翻訳者が異なる一連の写本を翻訳の基礎としているという事実です。

1. 聖書学者たちは、現存する写本を2つの主要なグループに分類しています。他にもいくつかありますが、それらはあまり信頼性の高い資料とは見なされていないため、それほど注目されていません。
2. これら二つの主要なテキスト群は、「アレクサンドリア本文」と「ビザンチン本文」と呼ばれています。
  - a. これらの名称は、それぞれのテキストタイプが**形成された場所**、すなわちエジプトのアレクサンドリア、あるいはビザンチン帝国（現在のトルコ（Türkiye）およびギリシャ）に由来しています。
3. 歴史家たちは、現存する写本のほとんどが、これら二つの本文系統のいずれかに帰属させることができることを突き止めています。
4. ここで「本文種」と言うとき、私が指しているのは、同じ特徴的な語句、異文、表現、そしてほとんどの場合、同じ地理的起源を共有する写本のグループのことです。

- a. アレクサンドリア本文の写本のほとんどはエジプト産であり、現存する最古の写本と見なされています。エジプトの乾燥した気候のおかげで、写本が書かれたパピルスの保存状態が良好でした。これらの写本の年代は通常、**2世紀から4世紀**の間とされ、原典が執筆されてから約100～300年後のものです。
- b. ビザンチン本文の写本はこれよりやや新しく、現存する最古の写本は4世紀から15世紀にかけてのものであり、その大部分は9世紀から15世紀のもんです。
- c. ビザンチン本文は、今日現存するギリシャ語写本の約85%～**90%**を占めており、一方、アレクサンドリア本文は5%～10%と推定されています。
5. さて、これら2つの異なるテキストに関する主な分岐点は、2つの異なる学派の考え方に基いています。
- a. アレクサンドリア本文を支持する人々が採用している一つの学説は、最も古い写本ほど、時間的に原典に近いことから、最良かつ最も信頼できる写本であるに違いないというものです。
- b. 一方、ビザンチン本文を支持する人々のもう一つの学派は、主にその数の多さに基づいています。数千もの写本がすべて一致しているように見え、その数が非常に多いため、より**信頼できる出典**と見なされるべきだということです。
6. この微妙な違いを、よく知られている「伝言ゲーム」を使って説明しようとする人もいます。大勢の人が一列に並び、あるメッセージを一人ずつ次の人に伝えていき、列の最後尾にいる人が、列の先頭の人から始まったメッセージを正しく理解できたかどうかを確認するゲームです。
- a. 例えば、50人が参加する「伝言ゲーム」を想定してみましょう。もし列に並ぶ一人ひとりが、ある写本家から次の写本家へと受け継がれてきた原本の写しを表しているとすれば、アレクサンドリア学派の考えによれば、原本に最も近い人物が最も正確な写本を持っている可能性が高いとされます。なぜなら、原本に対して間違いが生じたり、何かが追加されたり削除されたりする機会が少なかったからです。これは理にかなっており、その論理は理解できます。
- b. しかし、もしゲームが50人の一列から始まり、そこから100本の列に分かれ、それぞれの列が別の部屋へと続いていて、その部屋にはさらに50人がいたとしたらどうでしょう。そして、その100本の列の最後尾にいる人全員にインタビューしたところ、87人がまったく同じことを言い、8人が別のことを言い、残りの5人は支離滅裂なことを言っていたとします。あなたは、87人が正しい情報を得ており、残りの人たちは途中で何かを間違えたのだらうと考え、安心するでしょう。これが、ビザンチン本文に対する考え方です。

- c. 何世紀にもわたって蓄積されてきたビザンチン本文はすべて同じ内容を伝えており、現在残されているギリシャ語写本の85～90%を占めています。アレクサンドリア本文は5～10%を占め、残りの部分は他の本文類型ですが、これらは信頼できる本文として真剣に検討されることはありません。
7. したがって、これは必ずしも「正しい」テキストか「間違った」テキストかという問題ではなく、どの学派の考え方が最良であるかという問題なのです。私たちに一連の情報が与えられており、問題は「その情報を解釈する最善の方法は何か」ということになります。
8. もし「最も古いものが最良である」と考えるなら、アレクサンドリア本文を好む傾向が強くなるでしょう。もし「圧倒的な一貫性と数」が最も重要だと考えるなら、ビザンチン本文を好む傾向が強くなるでしょう。
- E. さて、ここで、聖書の中でこの情報がどのように提示されているかについて、私の考えや意見を述べさせていただきます。
1. 聖書の脚注や注釈に、「これは原典には見られない」とか、「これは最古の写本には見られない」といった記述があるのは、私は本当に好ましくありません。
2. 私の見解では、これら両方の記述は知的に不誠実です。
3. 「原文にはなかった」と言うのは、単に誰かが独自の偏った結論を下しているに過ぎません。事実、私たちに原本は一冊も残っていません。現存する何千もの写本のうち、聖書の著者たちが自ら筆を執った原本と見なされるものは一つもありません。たった一つです。ですから、原本がないのに「原本にはなかった」と言うのは、独断的であり、知的に不誠実だと感じます。
4. また、最も古い写本に特定の文章が含まれていないということも、誤解を招くものであり、不誠実です。より適切な表現は、「現存する最も古い写本」あるいは「我々が入手可能な最も古い写本」には、その文章が含まれていない、あるいは異なる内容が記されている、というものです。
5. 「最も古い写本にはその記述が含まれていない」と書くことは、その記述が後になってテキストに追加された想定していることになります。しかし、それが唯一の可能性とは限りません。特定の写本からその記述が省略されていた可能性もあります。あるいは、より古い写本にはその記述があったものの、単に時を経て現存しなくなっただけかもしれません。
- F. ここで、今朝取り上げる箇所と、歴史を通じて多くの人々がそれをどのように捉えてきたかについて触れたいと思います。
1. 聖書を開いていただければ、おそらくこの箇所について何らかの注記や脚注が記載されているのがお分かりになるでしょう。
- a. ビザンチン系テキストを基にしたNKJVをお読みの場合、NU（ネストル＝アランドおよびユナイテッド・バイブル・ソサエティの略称）テキストでは、この箇所が角括弧で囲まれていることについて、次のような説明が記されているかもしれません。これは、この箇所が原本には含まれていなかったものの、900点以上の写本にこの箇所が含まれていることを示しています。

- b. アレクサンドリア系テキストに基づくNIV、ESV、NASBといったより現代的な訳本を読んでいる場合、おそらく「最も古い写本にはこれらの節は含まれていない」あるいは「これらの節は後から福音書に追加されたものである」といった記述があるでしょう。
2. では、この一連の節はもともとヨハネによるものだったのか、それとも後から追加されたものなのか？まず、私がおその質問に代わって答えることはできないと申し上げておきます。これは、あなた自身が考えなければならない問題です。しかし、私自身の調査で分かったことをお伝えすることはできます。
- a. 「最も古い写本にはこのテキストが含まれていなかった」という主張は事実ではありません。学者たちが「最も古い写本」と言うとき、彼らが指しているのは主に2世紀から4世紀にかけて作成されたアレクサンドリア本文です。アレクサンドリア本文の主要な写本である『ヴァチカン写本』と『シナイ写本』は、いずれも4世紀のものです。
- b. しかし、これらよりも古い写本の中に、実際にこの文章を含んでいたものが存在したことはわかっています。これは、ギリシャ語からラテン語へ聖書を翻訳し、いわゆる『ラテン語ウルガタ訳』を作成した、ヒエロニムスという名のキリスト教の司祭兼修道士の証言から明らかになっています。
- i. ヒエロニムスは4世紀<sup>84</sup>、すなわちヴァチカン写本やシナイ写本と同じ世紀にこの作業を委嘱され、資料として、いくつかのより古いギリシャ語写本や、1世紀後半から2世紀初頭——ヴァチカン写本やシナイ写本よりも100年以上も前の時代——に由来する旧ラテン語聖書の多くの部分を用いた。
- ii. ラテン語ウルガタの編纂に関する注記の中で、ヒエロニムスは、参照した写本の中にはこの箇所を含むものもあれば、含まないものもあったと述べている。そして、当時入手可能だった情報に基づき、手元にある写本によってその記載が最も強く裏付けられていると判断し、この箇所を収録することにした。
- c. したがって、ヒエロニムスの証言からは、この箇所を含むより古い写本が存在したという歴史的証拠があるが、それらの写本は発見されていない。おそらくそれらは摩耗し、その後、新しい写本に置き換えられたものと考えられる。
3. 歴史的証拠に基づけば、早くも1世紀後半から2世紀初頭にかけて、互いに異なる写本が数多く存在していたようである。
- a. 実際、他の本文系統の一つである「西方本文」は、アレクサンドリア本文やビザンチン本文に次いで、おそらく3番目に普及している本文系統である。西方本文は2世紀初頭に遡るが、その翻訳は極めて自由で、多くの意識を用い、教えの要旨を伝えることに重点を置き、厳密な翻訳プロセスにはあまり重点を置いていなかったことで知られている。
- b. このように、初期の段階からすでに異文が存在していた。ヒエロニムスもこれに言及しており、学者たちはこうした異文の多くをまとめて一つのグループとして分類している。
- c. したがって、「最も古い写本にはこの本文が含まれていなかった」というのは、断じて誤りである。多くの写本には実際にこの本文が含まれていたが、現存する最も古い写本には含まれていない。
4. そこで、なぜ誰かが後からこの箇所を追加したのか、あるいは原本に含まれていたにもかかわらず省略したのかという疑問が生じますが、ここからが興味深いところです。
- a. 教父たちの歴史的記録には、初期教会の写本作成者たちが、この聖書の一節を好まなかったという記述がある。彼らは、この箇所が罪を容認していると感じ、それが罪を犯す口実として受け取られることを恐れていた。特に、この箇所の結末に基づいて、人々が性的罪に傾きやすくなることを懸念していたのである。
- b. ヒッポのアウグスティヌスは、次のように記している（引用開始）：「信仰の薄い者たち、あるいはむしろ真の信仰の敵である者たちは、おそらく、自分の妻が罪を犯しても罰せられないことを恐れて、写本から姦通の女に対する主の赦しの行為を削除した。まるで、『もう罪を犯してはならない』と言われた方が、罪を犯すことを許可したかのように。」（『姦通の結婚について』第2巻、第6〜7節）
- c. アウグスティヌスは、この記述を419年から420年の間に記しました。
- d. したがって、この箇所の省略を裏付ける歴史的な根拠があるという説が存在する。
- e. 一方、なぜ誰かがこの箇所を挿入したのかについて、合理的な説明は見つからなかった。ただ、イエスに関するこの話が人々に愛されていたため、誰かがヨハネの著作のどこかに必ず含まれたいと考え、単にヨハネによる福音書第8章のこの箇所に挿入することを決めたという説を除いては。
- f. 長年にわたり、この箇所は写本によって異なる場所に記載されていますが、すでに述べたように、その大部分、すなわち900点以上の写本では、この箇所がまさにこの同じ場所に記載されています。
- G. では、この箇所をどう捉えればよいのでしょうか。私はこの箇所について解説し、聖書の他のどの箇所と同様に扱っていくつもりです。
1. この箇所がヨハネの原著の一部であったかどうかについて、聖書学者の間では意見が分かれています。しかし、双方ともこの記述の真実性については一致しています。どちらのグループも、この出来事が実際に起こらなかったという説を信じたり支持したりはしておらず、皆、それが実際に起こったこと、そしてイエスの地上の宣教に関する歴史的に正確な記述であることに同意しています。
2. しかし、これがヨハネによって記されたものかどうかについては、意見が分かれています。
3. この記述から私たちが考慮すべき点は、聖書の他の部分と矛盾するような主要な教義的な立場が、ここには一切含まれていないということです。
4. 姦淫の現場で捕らえられた女性たちの物語は、古くから伝わる、愛され続けてきたものであり、イエスの人柄にふさわしいものです。この物語は、聖書の他のどの部分とも矛盾せず、

聖書の他のどの箇所とも矛盾せず、また、私たちが罪をどう捉えるか、イエスが罪にどう対応されたか、あるいはイエスと、失われた者たちに対するイエスの憐れみをどう捉えるかという点に、大きな影響を与えるものでもありません。これは、私たち全員が学ぶことができる貴重な物語です。

5. 私は、これが原典の一部であると信じています。それを証明することはできませんし、断定的に主張するつもりもありません。後世に挿入された可能性もあります。
6. 私が快く思わないのは、脚注や注釈で、「最も初期の写本には含まれていなかった」とか、「後世に追加されたものである」と断定的に述べられている場合です。それは単に、知的に不誠実であるように思えるからです。
7. また、私は、神が時代を超えて御言葉を保たれる力をお持ちであることを、心から信じ、確信しています。御言葉によってこの世界を創造された神には、御教会のために御言葉を保たれる力と能力があることを、私は確信しています。
8. 私は、今日私たちが持っているものが、歴史を通じて神の教会のために守られてきた、記録され、靈感を受けた神の御言葉であると信頼しています。
9. 聖書のこの部分は、1,400年近くにわたり、神の靈感を受けた御言葉の一部と見なされてきました。その受容が疑問視されるようになったのは、19世紀<sup>※</sup>になってからのことです。西暦400年頃から1800年代半ばから後半にかけて、このテキストは、最愛の弟子ヨハネによって記された神の靈感を受けた御言葉として、教会によって普遍的に受け入れられていました。

H. それでは、この箇所を深く掘り下げ、神が私たちに何を留意してくださっているのかを見ていきましょう。冒頭の7章53節から8章2節までをもう一度確認してみましょう。

### III. ヨハネによる福音書 7章53節～8章2節；**説教のタイトル**

A. 先週の聖書箇所は53節で終わり、皆が家に帰るところで終わりましたが、第8章1節は明らかに第7章の終わりにつながっています。

1. 仮庵の祭りの最終日の出来事が終わった後、皆はそれぞれの家へ帰りましたが、イエスはオリブ山へ行かれました。
2. イエスには、エルサレムに自分の住まいはありませんでした。オリブ山は、イエスが頻繁に訪れ、時間を過ごしていた場所でした。
  - a. また、オリブ山の斜面にあるベタニアには、イエスの友人が何人が住んでいたこともわかっています。この時期、イエスはマリアやマルタ、そして彼らの兄弟ラザロのところに滞在していたのかもしれません。
  - b. もし祭りの最終日が「第七日」を表すのであれば、仮庵の祭りの終了後に続く聖なる集会のために、エルサレムへ移動できる範囲内に留まるため、イエスがオリブ山で星空の下で眠られた可能性は極めて高いでしょう。
  - c. 安息日には、律法を破ることにならない範囲で、人々は一定の距離しか移動することが許されていませんでした。したがって、エルサレムに近い場所に留まるために、イエスは単に神殿の丘の向かいにあるオリブ林の中で眠られた可能性が極めて高いのです。

B. 朝早く、イエスは再び神殿に入られたと伝えられています。

1. 「早朝」という言葉は、夜明け、つまり太陽がちょうど昇り始めた頃を指す言葉であり、イエスはその時間に神殿へ向かわれました。

C. そして、この箇所によると、その朝早く起きて神殿に集まっていた人々は皆、イエスのところへやって来ました。そこでイエスは彼らの真ん中に座り、教え始められました。

1. さて、ここがその場面です。仮庵の祭りが終わった翌日です。イエスは前日、渴いている者は皆、自分のところに来て飲みなさいと招いておられました。そして今、多くの人々がやって来てイエスの周りに集まり、イエスから何かを受け取る準備ができていたその時、突然、律法学者やパリサイ人たちが現れたのです。
2. 彼らが何をしたのか、またその行動の背後にある意図が何であったのかを見るために、3節から6節の前半までを読みましょう。私が自分の聖書から読むので、皆さんも自分の聖書と一緒に追ってください。

### IV. ヨハネによる福音書 8章3節～6節前半；

A. 早朝、イエスが教えを聞くために集まった群衆に説教をしておられる最中、律法学者たちとパリサイ人たちは、姦淫の現場で捕らえられたこの女性をイエスの前に突き出し、彼女をどうすべきか、イエスの見解を尋ねた。

1. 彼らはイエスに言いました。「先生（これはきっと皮肉を込めて言われたのでしょう）、この女は姦淫の現場で捕らえられました。モーセは律法の中で、このような者は石打ちにすべきだと命じています。しかし、あなたはどのようにお考えですか？」

B. 律法学者やパリサイ人たちは、イエスに対して完璧な罠を仕掛けたと信じていました。イエスがどのような答えを出そうとも、嘲笑や非難的となり、場合によっては深刻な窮地に陥るだろうと考えていたのです。

1. 律法学者やパリサイ人たちの考えは正しかった。モーセの律法では、この種の性的罪、すなわち姦淫に対する刑罰は死刑と定められていた。
  - a. レビ記20章10節には、「他人の妻と姦淫を犯す者、すなわち隣人の妻と姦淫を犯す者、姦夫と姦婦は、必ず死刑に処せられる。」と記されている。（**レビ記20:10**）
  - b. 申命記22章22節には、「もし、夫のいる女と寝ている男が見つかったなら、その女と寝た男も、その女も、二人とも死ななければならない。こうして、あなたはイスラエルから悪を根絶しなければならない。」（**申命記22:22**）と記されている。
2. しかし、ここには腑に落ちない点がある。律法によれば、男も女も共に死刑に処されることになっている。女は姦通の現場で捕まったとされるが、俗に言うように「踊るには二人が必要」である。では、この一連の出来事において、男はどこにいるのだろうか。
  - a. 多くの人々は、おそらくその男も宗教指導者たちのこの小さな陰謀に加担していたのではないかと指摘している。つまり、宗教指導者たちは、この男にこの女性を

姦淫を犯させ、宗教指導者たちがこの状況を利用してイエスを罠にかけようとしたのだと。

- b. つまり、この一連の出来事はすべて仕組まれたものであり、この女性は、イエスを重い刑に値する罪で告発しようとする彼らの策略における単なる駒に過ぎなかったのだ。
- c. だからこそ、宗教指導者たちは二人が現場で捕まる場所を正確に把握していたのです。すべてが仕組まれたことだったので。そうでなければ、どうして彼らがたまたまこの女性に遭遇し、まさに姦通の最中である彼女を見つけ出せたというのでしょうか。
- d. 聖書本文には具体的にそう書かれてはいませんが、この時点までの宗教指導者たちの行動を踏まえると、彼らならやりかねないと思います。
- e. これは、イエスを軽蔑し、彼を攻撃する彼らから私たちが予想する行動の範疇に十分収まるものです。

3. つまり、彼らは、イエスが失われた者たちに対して抱く憐れみの心を、モーセの教えと対立させることで、イエスを陥れようとしているのです。

4. しかし、ここに彼らの罠の仕掛けがある。もしイエスがモーセの側に立ち、彼女を石打ちの刑に処すべきだと言ったら、宗教指導者たちは、イエスが誰かを処刑するよう提案することでローマ法を侵害しようとしているとして、イエスをローマ人たちの前に引き渡すことができるのだ。

5. 当時、支配権を握っていたのはローマ人でした。彼らはサンヘドリンに対し、宗教法を施行し、小規模な民事・宗教的事項を裁くための限定的な権限を与えていましたが、死刑を執行する権利だけは彼らから剥奪されていたのです。

- a. だからこそ、後に宗教指導者たちはイエスをポンティオ・ピラトのもとに連れて行き、自分たちの代わりにイエスを処刑させようとしたのである〔ヨハネ18:31b〕。

6. つまり、イエスはローマ当局との間で厄介な事態を招く恐れがあるだけでなく、宗教的エリート層が見下していた庶民や一般大衆からの支持を失う危険にもさらされることになるのです。

- a. イエスは、徴税人や罪人の友であるという評判を築いていました。人々はイエスについて、「見よ、大食漢で酒飲み、徴税人や罪人の友だ!」と言いました」(ルカ7:34b)

7. つまり、彼らがイエスを追い込んだと信じているのは、このような窮地なのです。

- a. もしイエスが、その女に対して何の処置もすべきではなく、彼女を解放すべきだと言えば、イエスはモーセの律法に背くことになり、彼らはイエスを偽教師であると告発できるようになる。
- b. もしイエスが、彼女を石打ちにするべきだと言えば、イエスは多くの民衆の支持を失うことになり、彼らはイエスを何らかの扇動者や民衆を煽る者として、ローマ当局に告発することができる。

C. そして、6節の冒頭にあるように、これらすべては、イエスを試み、何らかの罪状をでっち上げようとするための、巧妙に仕組まれた罠に過ぎなかったのです。

1. イエスを排除し、自分たちの権力を確保するために、宗教指導者たちがどれほど墮落の底まで墮ちてしまうのかを見るのは悲しいことです。

2. さらに驚くべきことは、彼らが律法への熱意を装いながら、実際には自ら律法を破っているという点だ。彼らはこの女性を律法の文字通りに裁こうとする一方で、自分たちの偽善や、自分たちが律法を破っていることには**全く気づいていない**。

- a. 律法によれば、男も女も共に死刑に処されるべきでした。しかし、彼らはそれを守りませんでした。
- b. 律法は、律法違反で告発された者に対しては、証言が一致する複数の証人が必要であると定めていた。彼らには公正な裁判を受ける権利があるはずだが、この女性にはそのような機会は与えられなかった。
- c. 律法は出エジプト記23章で次のように定めている。「偽りの報告を広めてはならない。悪しき者たちと手を組み、不義な証人となってはならない。群衆に流されて悪を行ってはならない。また、争いにおいて、多くの人々に追隨して正義を歪めるような証言をしてはならない。」(出エジプト記23:1-2)
  - i. まさに、これらの人々はそれを行っているのです。彼らは正義を歪めようとしており、制度を正義や善のために用いるのではなく、人々に対して悪用しようとしています。彼らは神の律法を嘲笑しているのに、そのことに気づいていません。

D. さて、イエスがこの状況にどう対応し、彼らが仕掛けた罠をどのように回避されたかを見てみましょう。6節の残りの部分から8節まで、一緒に読み進めましょう。

V. ヨハネによる福音書 8:6b-8;

A. 罠のどちらかの側へ追い込まれる代わりに、イエスはしばらくの間彼らを無視し、身をかがめて地面に何かを書き始めました。

1. さて、イエスが何を書かれたのかはわかりません。しかし、何かを書かれたことは明らかです。それは、これから見ていくように、宗教指導者たちに深い影響を与えるような、非常に重要な何かだったのです。

B. 宗教指導者たちは罠を仕掛けようとしたましたが、イエスはただ彼らを無視されました。

1. イエスが身をかがめて地面に書き記している間も、彼らは繰り返しイエスに問いかけ続けました。7節で「彼らは問いかけ続けた」と記されている動詞の時制は、継続的な問いかけを示しています。

2. イエスが身をかがめて書き留めていたのは、ほんの数秒間のことではなく、おそらく数分間にも及んだでしょう。イエスは身をかがめて地面に何かを書き、彼らは答えを待ちましたが、何も得られませんでした。そこで彼らは再び尋ねましたが、やはり何も得られませんでした。彼らは待ち、また尋ね、そしてまた尋ね、さらにまた尋ね続けました。その間ずっと、イエスは神殿の地面に座り、地面に何かを書き続けていたのです。

3. さて、興味深いことに、イエスがいた神殿の敷地は、大きくて滑らかな石でできていたことがわかっています。イエスが緩い土の上に何かを描いていると想像してはいけません。イエスがいた神殿の敷地には、緩い土などなかったのです。

4. イエスは石の上に書いていたのです。神殿の床は、おそらく汚れ、あらゆる種類のほこり、あるいは破片さえも散らばっていたことでしょう。

- a. 過去7日間、神殿は仮庵に住み、神の恵みを祝う人々に溢れかえっていました。彼らは祝祭の間、一晩中踊り、歌い続けていました。ここは、踊りと歌の最終日の翌朝早くのことで、床は間違いなく汚れており、ほこりだらけだったでしょう。
5. そしてイエスは、指を使って、ほこりだらけの汚れた石の上に書き始められました。繰り返しますが、イエスが何を書かれたのかは分かりません。しかし、この光景は、神の指が石に書き記された別の出来事を私たちに思い起こさせるはずです。
- a. 思い出していきたいと思いますのですが、出エジプト記には、神がシナイ山でモーセとの語り合いを終えられた後、出エジプト記31章18節によると、神の指によって書かれた「証しの石板」、すなわち二つの石板をモーセに授けられたと記されています。（**出エジプト記31:18**）
- b. ここで私たちは、イエスが身をかがめて、神殿の石の床に、一度だけでなく二度も、ご自身の指で何かを書き記される姿を見ます。
- c. このため、多くの人は、イエスが神の律法の制定者としての権威を象徴し、表すものとして、指で十戒を書き記したのではないかと考えています。
- d. また、イエスはまず、宗教指導者たちが自ら犯していた罪を書き記し始めたのではないかと、と示唆する者もいます。
- i. おそらく、イエスは最初に身をかがめて罪を書き記し、二度目にそれらの罪を犯した宗教指導者たちの名前を書き記されたのでしょう。
- e. これを、預言者エリヤが「イスラエルの望みである主よ、あなたを捨てた者はみな恥をかく。わたしから離れる者は、地の上に書き記される。彼らは、生ける水の泉である主を捨てたからである。」（**エリヤ17:13**）と述べたエリヤ書17章13節の成就である可能性があると考えられる者もいる。
- i. また、ここで宗教的エリートたちに起こった出来事を、この預言の成就と見なす人々もいます。彼らが主を見捨て、その名が地の石に記されたのです。
6. しかし正直なところ、イエスが神殿の石の床に何を書かれたのか、私たちに全く分かりません。
- C. さて、文字を書き記す合間に、イエスは立ち上がって次のように述べられました。「あなたがたのうち、罪のない者が、まず彼女に石を投げなさい。」
1. こう言うことで、イエスは神の律法を軽んじたり、律法に反する判断を下したりすることを避けています。要するに、イエスはこう言っているのです。「そうだな、*君たちの言う通りだ。この件に関しては、律法は死刑を定めている。罪のない者がいれば、さあ、その者が最初に石を投げなさい。*」
2. 律法によれば、誰かが死刑を宣告された場合、最初に石を投げるべき者は、その犯人に対する告発を裏付けた証人たちとされていた。

- a. 『申命記』17章には次のように記されています。「死に値する者は、二、三人の証人の証言によって死刑に処せられる。一人の証人の証言だけでは死刑に処してはならない。まず証人たちがその者を死刑に処し、その後、民全体がその者を処刑する。こうして、あなたがたは、あなたがたの中から悪を取り除かなければならない。」（**申命記 17:6-7**）

3. 律法は、2人以上の証人の存在を義務付けており、それらの証人は、真実を語っていること、その行為に加担していないこと、また偽証をしていないことを確認するために尋問されなければならなかった。
4. もし彼らが共犯者であったり、偽証をしていたことが判明した場合、彼らは被告人が告発された罪と同じ刑罰を受けることになっていた。これは申命記19:15-19に定められている。[**申命記19:18-19**]
5. したがって、イエスが「あなたがたのうち、罪のない者が、まず彼女に石を投げなさい」と言われたとき、イエスは宗教指導者たちを厳しく非難しているのです。もし彼らが証人であるならば、律法に従って審査を受けなければならず、もし共犯者であったり、何らかの形でこの陰謀に関与していたことが判明したならば、彼らもまた石打ちの刑に処されなければなりません。イエスは、自分たちに何の過ちもないと考えるなら、最初に石を投げなさいと彼らに呼びかけているのです。しかし、イエスは彼らがそうではないことを知っておられます。
6. そして、イエスが地面に何を書かれたにせよ、それは彼らに、イエスが彼らの計画を完全に把握していたことを知らしめたのだと思います。9節と一緒に見てみましょう。

## VI. ヨハネによる福音書 8章9節；

- A. イエスが再び身をかがめて、神殿の石の床に書き始めると、年長者から順に、最後の一人に至るまで、その女性を告発していた者たちは一人また一人と立ち去っていった。

1. 9節は、イエスが「あなたがたのうち、罪のない者が、まず彼女に石を投げなさい」と言われた言葉を聞いた者たちが、良心に責められたことを伝えています。
2. 彼らの良心は、イエスを陥れるためのこの罠に加担していたことを彼ら自身に告発したのです。そして、もしそれが露見すれば、彼らもその女性と同じ刑罰に処されることになるでしょう。そこで、年長者から末っ子へと、まるで行列のように、一人また一人と次々とその場を立ち去っていったのです。
3. 彼らの罠は失敗に終わりました。イエスは彼らの罠を彼ら自身に跳ね返させ、彼らはただ立ち去るしか選択肢がないことを悟りました。さもないと、偽証者として暴露され、同じ死刑の判決を受けることになるからです。

- B. 最後に、10節と11節の最後の二節を見て、この箇所を締めくくみましょう。

## VII. ヨハネによる福音書 8章10～11節；

- A. イエスは、その女性を告発していた者たちが全員立ち去るのを待ってから、再び立ち上がり、そうしながらその女性に言われました。「女よ、あなたを告発していた者たちはどこにいるのか。あなたを罪に定めた者は一人もいなかったのか。」

1. 「裁いた」という言葉は、司法的な判決を指しています。「あなたに対して裁きを下し、刑を宣告した者は誰もいなかったのか？」というのがその意味です。

B. その女性は、「誰もいません、主よ」と答えた。

1. この女性は、死罪に値する姦淫の現場そのもので捕らえられていた。律法によれば、彼女は死に値する者だった。
2. しかし、ここで彼女はイエスと顔を合わせることになった。自分に対する告発の罪を犯し、死刑の刑に直面しているにもかかわらず、イエスは彼女を見つめてこう言われた。「わたしもあなたを裁かない。行って、もう罪を犯してはならない。」
3. 姦淫の現場で捕らえられた、この恵みに値しない女性の上に、主の恵みと憐れみが注がれたのです。
4. 彼女の罪はイエスの目の前にあり、彼女自身の力ではその罰から逃れる術はありませんでした。イエスは彼女を裁くことを選ばず、代わりに彼女に豊かな恵みを注がれたのです。なんと驚くべきことでしょう。
  - a. 以前、ヨハネの福音書の学びで触れたように、イエスは世を裁くために遣わされたのではなく、御自身を通して世が救われるために遣わされたのです。[ヨハネ3:17]
5. イエスは、この女性の罪を非難されませんでした。イエスは彼女を見つめ、恵みと憐れみを惜しみなく注ぎ、悔い改めへと招かれたのです。
6. しかし、イエスはこの女性の罪を非難しなかった一方で、その罪を容認したわけでもなかったことを指摘しておく必要があります。なぜなら、イエスは「行って、もう罪を犯してはならない」と言われたからです。
  - a. イエスは単に「私もあなたを裁かない」と言って、その女性が罪深い生き方を続けるままにしておいたわけではありません。いいえ、イエスは「行って、もう罪を犯してはならない」と言われたのです。
  - b. イエスは彼女の罪を非難しなかったし、容認もしなかった。イエスは彼女に、罪から悔い改めるよう呼びかけた。生き方を改めるよう。主の御心に反するような生活を送るのをやめ、自分の道を進むことはしても、彼女をこの状況に追い込んだような行いをやめるよう求めたのである。
  - c. イエスは罪を容認も非難もしませんでした。罪を指摘されました。そして、これは重要な点です。
  - d. イエスは罪に対して甘い態度をとられたわけではありません。イエスは罪を指摘されました。人々に悔い改め、生き方を改めるよう呼びかけられたのです。そして、今日でもイエスは同じことをなさっています。

## VIII. 結論：

- A. この聖書の箇所を考察し、それを私たち自身の生活に当てはめようとするとき、この物語に登場する主要な登場人物たち一人ひとりから、何かを学ぶことができると私は信じています。
1. 宗教指導者たちからは、罪に関して自己反省し、自分の心を探り求めることの重要性を学びます。私たちは、他人の過ちや罪をすぐに見つけ出し、それを激しく非難したくなる一方で、自分の罪や欠点

には気づかないままになりがちです。

- a. 他人の人生にある罪を見るのと同じくらい容易に、自分の人生にある罪を見抜く者でありたいものです。そして、

他人の生活を吟味し始める前に、まず自分の心と生活を吟味しようとする者でありたいものです。

b. 自分自身の恵みへの必要性を無視しながら、他人を安易に非難するような人になってはいけません。

2. この女性から、イエスと二人きりで向き合い、その恵みを受けることの重要性を学びます。

a. 今朝ここにおられ、罪に囚われている方がいらっしゃれば、イエス様があなたと会いたいと願っておられることを知ってください。イエス様は、あなたに愛と恵みを惜しみなく注ぎたいと願っておられ、悔い改めへと招いておられます。

b. 神の恵みは罪を容認するものではなく、私たちの罪の罰から私たちを解放するものです。もし私たちが神のもとに来て、自分の罪を告白し、神が私たちのために備えてくださった恵みを受け入れるなら、神の恵みは私たちの罪の罰を消し去ってくださいます。

3. イエス様から、私たちは、イエス様が罪を容認することも、罪を断罪することもなく、それと同時に罪を指摘し続けたことを学びます。

a. 聞いてください。私たちはイエスの忠実な弟子でありたいのです。イエスは人々を裁くために来られたのではありませんが、真の悔い改めへと招くために来られました。イエスは、罪を「罪」と呼ぶことを恐れませんでした。

b. 私たちもイエスのようにならなければなりません。周囲の世界に神の愛と恵みを分かち合いつつ、それでもなお罪を指摘し続けなければなりません。

c. 私たちは愛と恵みと憐れみのメッセージを宣べ伝えますが、それは悪を容認したり、罪を美化したりすることを代償に行うものではありません。

d. 私たちが周囲の世界に神の愛と真理を大胆に分かち合い、人々が罪から救われ、神の家族に加えられるのを見られることを願います。アーメン？ アーメン。祈りましょう。